

# 《生命》論への第一章

山下善明\*

奥山の清流に棲む岩魚<sup>いわな</sup>は、大雨が近づくと、粒石を呑んで身体<sup>からだ</sup>を重くするという。やがてやって来る激しい水流に流されないようにである。下流の、水温が二十度近くになると、岩魚はもう生きて行けないのである。

## 前半Ⅱ死

「人々は生きるためにこの都会<sup>まち</sup>へ集まって来るらしい。しかし僕には、むしろ、ここではみんなが死んで行くと思えないのだ。」<sup>①</sup>「——みんなが死んで行く、みんな病院で死んで行く。たとえば市民病院。古い歴史をもつというその病院でも、「今では五五九にもふえたベッド。まるで工場か何かのような様子に変わってしまったている。」そのような病院での大量死のなかでは、一人／＼の死など一々構って

はおれない。このような巨大な機構のなかでは、死もその機構が回転する一齣でしかない。そこには、病院の施設に対応した一様の死しかない。死にそれぞれの違いがあるとしても、それは、死因となった病名の違いだけである。病人達は、死因となった病気の診断書を貼り付けられて、誰のものでもない謂わば匿名の死、無名の死を死んで行く。ただ第何病棟の第何号室の患者の死。「人は何の造作も要らない。——御心配なさいますな、これがあなたの死。——あ、そうですか。……人は誰も、病気がもって来た死を宛てがわれるだけで、あらゆる病名がわかってしまっただけというもの、どんな結果もみんな疾病のせいとなり、病人自身にはもう何もすることがないのだ。」

——マルテはそこから自りで、捨てて来た故郷デンマークのウルスゴール村の古い屋敷で祖父が死んで行った日の思い出に帰って行く。「……声の主は、祖父デトレフではなく、デトレフの『死』そのものであった。その大きな声は、宏大な屋敷の外まで聞こえた……」だがまた想い出から返って——二十世紀もまだ始まったばかりの、しかし世界有数の近代都市パリ。既にクロヴィス王の時代というから五世紀末に始まるこの非常に古い施養院も、その近代都市の中の近代病院とならざるを得なかった。まして最近創建されたばかりの陸軍病院などは。そして近代都市に住む市民達は、病を得れば、それらの近代病院に運ばれ、そこで死んで行く。——「僕には、むしろ、ここではみんなが死んで行くと思えないのだ。僕はいま外を歩いて来た。僕の目に映ったのは、病院ばかりだった。」パリが病院の多い街だというのはない。外観は他とかわらずとも、毎日のごとく許多<sup>あまた</sup>の死のあるその建物が、異様に目につかないはずはないのである。この孤独な若い詩人の眼に。そしてその詩人自身、この街にやって来たも

のとして、怯える。「もしここで病気になったとしたら、思っただけで身が震える。誰かが不図思い立って、僕を市民病院に運び込むだろう。僕はきつとそこで死ぬに決まっているのだ。」そんな思いをもって病院近くの広場に立っていたマルテが「何気なく目を遣ると、幌のない辻馬車がやって来た。辻待ちの、規定料金で走るやつだ。一時間で二フラン。死んで行く一時間がたったの二フランなのだ。」つまり何という小さな死であることか。

近代哲学の父、ルネ・デカルトが、一六五〇年、五五歳をもってスウェーデンのストックホルムで肺炎のため客死した時、故国パリの新聞は次のように報じたという。「自分の病を意のままに癒し、老衰から自由でありうるのみか、寿命をも延ばしうると夢想した愚か者が死んだ」と。この新聞の記者は、おそらく『方法叙説』の次の箇所を指して書いたのであろう。「かくて、諸々の勢力ならびに作用をそれぞれに固有な用法において私どもが用いることができ、私どもを自然界の主人にして所有者のごときものとなしうることを、この哲学は私に示してくれるのである。かようなことは、……人生の第一の財宝で、また他のあらゆる財宝の基礎でもある健康の維持のためにこそ、望ましいのである。なぜなら、……人間を今までより一層賢明に、一層有能にする手段ありとするなら、それは医学のうちに求められるべきであろうから。……身体と精神とを通じての数限りなき病氣から、おそらく老年の故に衰弱することからさえ、それらの原因についての充分な知識をもち、自然が予め私どものために備えておいた凡ゆる治療法を充分に究めるならば、免れうるであろうことも、これまた確かである。」

生命は測り難い。「一人の生命は全地球よりも重し」は、出来の悪い言葉であるけれど。しかし、測り難い生命も、一つだけ「賢明」にも測るやり方がある。それは、ベルグソン流に言えば、生命を定置して謂わば逆算的に測定することである。「愚かさ」は、その測定値を生命そのものの値と勘違いしているところにある。魚を水の中から引き上げ、乾いた土地の上でどれだけ長く命がもつかをもって、その魚の生命力を計ろうとするのは、愚かなことである。病氣の原因となるものを、また老弱をもたらしすものを差し引いて行っても、そこに純露な生命があるのではない。あるのは測定値ばかりなのである。かといって、差し引いたものを再び加算合計しても、そこにはもう二度と生命はないであろう。

しかしデカルト以後、近代医学の進歩がデカルトの「夢想」を夢想にとどめおかなかつたかに至って今日、それだけ一層目に見えぬ、より大きな愚かさをもって、無数の小さな「愚か者」達が、この偉いなる愚かな哲人の真似をし続けている。デカルトにはまだしも、非デカルト的な、「自然が予め私どものために備えておいた治療法」があったのだが。

生命論において機械論メカニズムと生氣論ヴィタリズムは、鳥鷲を闘わすこと、ギリシャ自然哲学より既に二千数百年に及んでいる。そうしてそれは、一九世紀の、もはや生物誌バイオグラフィではない『生物学』の誕生以来の対立となる。しかしその生物学において機械論は、もはや機械論という形而上学ではない。それは、生命現象の背後に生命本質があるのではなく、生命現象の背後にはやはり現象があるばかりだから、ただそれを辿るだけだというのである。現在未だ生命現象についての統一的な物理・化学的

方程式が出来ていないのは、生命本質についての認識が欠けているからではなく、物理Ⅱ化学的な知識がなお完全でないからにすぎない。これまでも、背後にはいつも現象しかなかった。生物学とは即ち、生命本質を語ろうとする生気論の敗退の歴史である。古いところで言えば、一八二八年、ヴェーラーは実験室内で初めて有機化合物・尿素を作り、一八九八年、ブフナーは、細胞外に取り出したチマーゼによって発酵現象を人工的に起こさせ……<sup>③</sup>

生物学は初めから、自らの終焉へ向かって進む学である。自らの消滅をもって完成する学である。というのは、物理Ⅱ化学的方程式のなかに、生命体のみに固有な謂わば新素粒子の存在が発見されるであろうその日は、「生命は何であるか」がわかるのではなく、むしろそれがわからないということが、最終的に明らかになる日だからである。だが、目の前になお生命体があるだろう。だから、その生物学の終焉の日は、それまで退去に退去を重ねて来た生気論の全面的な復活の日なのである。

無論、それはしかし、生気論が最後に凱歌を奏するということではない。

三好達治は『囁き』という戯れ唄のような詩を遺している。その一節。

鵲鴿——川の石のみんなまるいのは、私の尾でたたいたためです。

河鹿——いいえ、私が遠くからころがしてきたためです。

石——俺は昔からまるかったんだ。

だが、「昔から」そうであったのなら、生物学の終りの日になって初めて知るまでもなからう。生命は目の前にある幻しであることを。

しかしどのように目の前に？ ゲーテ『ファウスト』のなかの《虹》こそ、目の前にある生命であるだろうか。

されば、照る陽はわが後方にあれ。

流れは岩を咬み、滾り落ち

魅入られて高まるわが歎び。

激しく落ちかゝりては

千の流れ万の流れと溢れ

空高く霧しぶく。

この水煙のうちより生れ出で

懸け渡る虹の弓

移ろいてとどまる。

……………

……………

そこそ、人のいそしみを映し出す。

しばし想え、やがてわれら

彩りある映像

そこに、生命ある見る。

『ファウスト・第二部 優雅な土地』<sup>④</sup>

この一節を指してであろう、西田幾多郎は言っている。「絶対無の自覚の抽象的ノエマ面として表現の野と考へられるものが、却つて直接に我々の内的生命の内容を映すといふことができる。ファウストの如く人生は彩られた影の上にあるといふことができる。」<sup>⑤</sup>とすれば、その西田が、われら「人のいそしみ」はもちろん、単なる「生物的生命」といへども、科学的にはどこまでも不可解的である。唯だその成立の

物質的条件を明かにするのみである。」<sup>(5)</sup>と言う時、それは生物学的知識の現状への一見といったものではない。あれから半世紀、生命科学の進展を見て改められなければならないが如き一見ではない。人間の生命に立ち戻って、例えば木村敏氏の言うところを聞いてみるならば、精神病理学者であると共にまた臨床医である氏は、文字通り「精神と身体を通じて」の、この両方に跨る疾患の一つ、分裂症について次のように述べている。個々の分裂病症状は確かに薬の投与によって軽快させることができる。だから、このような症状の基礎に何らかの生化学的病変を想定するのは、充分に正当なことである。しかしその生化学的異変それ自体も何らかの原因によって発生したものであるに違いない。ところがこの発生そのものも、またやはり生化学的な変化といえるのかどうか、薬の効能性からは何一つ証拠を得ることはできない。つまり分裂症の生化学的な研究がどれほど進んでも、精神的症状の基に想定される身体病理学的変化それ自体は一体いかに生ずるのか、その成因論に関しては何ら確かな接近法ももたえないのである。<sup>(7)</sup>つまり、その病の背後には廻りえないと。あなたも私も、いつでも精神病になりうる。それは遺伝によるのではない、環境によるのでもない。ただ、あなたも私も人間の生命であるが故に。だが、このことは、人間の生命における精神病理についてのみ当てはまることでは、おそらくあるまい。

いづれにしても、精神の病理を人間の生命そのものの病いと見る精神病理学者木村氏は、『生命あるもの』を生命ある『もの』に固定して解剖、分析する生物学的医学とは別のところで、『生命あること』それ自身と対い合う。それが、氏が同時に臨床医たることの意味である。

生命あるものとして、勿論人間も生物の一種にすぎないけれど、生命あることとしては、逆に、人間の生命のみならず生物的生命も、科学的には不可解である。しかし実際には、生物学は、あるいは生命科学は、生命の「成立の物質的条件」をすら明らかにするのではない。ただ生体の物理変化、化学的反応を明らかにするのみである。そして生体の死において物理変化が、そして死から幾時か経て化学反応もなくなつて初めて、それらが生命の物質的条件であつたと推測するだけである。生の間において、況んや生の後において、条件であることそのこと自身は、直知すべくもない。

だがそれなら、物質的条件が条件をなさなくなる死は、つまり物質的条件で『ある』が、既に『ない』となるのは、一体いつの時点のことであつたのか。帰結はむしろ反対ではないのか。つまり、それらの物理変化、化学反応は、生命を前提しなければありえなかつたといふべきではないのか。要して言えば、生命の物質的条件といふものは一体あるのか。あるのはむしろ、物質の生命的条件といふべきものではないのか。

しかし、生気論のごとくに生命自体というものを前提ないし想定することはできないというのなら、生命の物質的条件という推測が確認されるのは、物質的条件のすべてが一つ残らず揃えられ、その、揃つた時が即ち生命である時である。つまり生命の再現可能性のうちに生命は存在することにならう。否、生命とは、生命の再現可能性そのものに他ならないことにならう。果してそれが、現代医学の治療である。よって、現代医学には不治の病は存在してはならないのである。臓器移植は、その最も明白で最も原始的な一結論でしかない。そして、移植を受けた生体は、『拒絶』という生命として最も原始的な反

応を示すばかりだろう。

もはや死は——それは生の限界であるのではなく、医学における生の再現可能性の限界にすぎない。だが、医学の限界が押し拡げられ生の限界に追いついて、いつか生の限界と医学の限界がちょうど重なり合う日が来るだろう。その時になれば、『死の判定』に医学はもう迷うことはなくなる。否、こう言うべきである。医学は、その時、その全体が予防医学となるだろう。その全体が、とはつまり、生命の終点を見据えて0歳児からの予防医学となるだろう。ここにこそデカルトの『夢想』は実現するのである。それは、近代医学の最終的勝利だが、しかし勝利による敗退である。その時より、0歳児達は、自分自身の生命でない生命を、謂わば模造の生命を生きて行くことになるであらう。

しかしその時まで、『死の判定』とは、医学の自らの限界の謂わば自己測定のことであり、かててその困難さのことである。病人達は、その困難ななかで判定された死でしかない死、精緻な判定のためにいよいよ判定困難になった小さな死が、マルテの言うように、「これがあなたの死」と宛てがわれる。そして医師達は再び生命を見出す。判定されたどうりに死せる状態の。

こゝに一つ、比較的最近の臨終記がある。少なくとも浴びた太陽の光からいえば、いややはり太陽のようなその生命の輝きの故に一時代の青春の英雄であつた石原裕次郎の最期を、兄の慎太郎氏が筆にとどめている。英雄には英雄に相応しい死がなければならぬのだが、しかしやはり過ぎた青春の英雄でしかなかったか——

「医者にはもはや彼の顔ではなしに、手元の計器ばかりを覗いてい、

後は人間以外の機械に大事な判定を仰ごうとしているようであつた。……そしてやがて主治医の中の最年配の医者が計器から私たちに向つて顔を巡らせ、重々しくうなづいた後、念のためのように、聴診器を弟の胸に当て、『御臨終です』と告げた。」

死の判定を精緻な医療機械に仰いだ医師が、再び生命を見出した時は、それはもはや、死せる状態の生命であつた。それが、「念のためのように」直接に当てられて無音の聴診器の意味である。

だがそれでも、かつての英雄の最期に、一瞬太陽の残光のようなものが差し渡る。さすがに文学者の兄はその瞬間を見逃さず、書き留めている。

「しかし私は、彼らとは逆に、彼らが今まで見守っていた計器を見直してみた。医者の判断を覆すように、私の目の前で弟はまた再び、一度止まった心臓を鼓動させることで、計器の針を動かしてみせた。

「先生、まだ心臓は動いている」

たつた今まで願っていたこととは逆に私は医者たちに告げ、彼らは驚いたように顔を見合わせ、うなづいた。」

「たつた今まで」兄は、体ごとの喘ぎが小さくなって行くいかにも苦しい弟の様子を見て、「自分のためにも、今日の前で、出来るだけ早く、弟が死ぬこと」を本気で「願っていた」のである。兄は弟に向かつて、繰り返して「もういい、もういいよ、もういいんだよ」と言っていた。死に行く人はその最後の生命を、自分のために生きるのではない。むしろ、それを見守る人のために、見守る人と共に生きるものである。

兄は続けて書いている。

「それから一時間ほどの間に、さらに二度心臓は止まってはまた動

き、……医者達は呆然たる顔で、死んではまた生き、また死んでは生き返る患者を眺めていた。私はなぜか、弟の死についてこの私こそがその瞬間を彼らに告げてやらなくてはならないような気がしていた。」

医師とは、近親の者らの心にはまだ終っていない終りを告げる者のことである。初めて終りを告げる最後の告知者である。しかしその初めそのものは、やはり既に近親の者らの心のうちにおいてあるだろう。つまり、死に行く者は、見守る者達のそのような初めと終りとの間に死に行くのである。

「傍らの計器に目を配りながら、私は、……顔が触れるほど間近で弟の顔をみつめていた。海の上や、水の中で長らく暮らしていると、あれほど大きなもののなかに、ある瞬間を岐点に海全体に上げていた潮が止まり、そして次の瞬間から引いていくのがはつきりとわかることがある。彼の生の終わりの瞬間も私にははつきりと見てとれた。」

一望のもとにしかその全貌を現わさぬ大きな海、しかし一望のもとでは、レースの縁どりのような波打ち際のほかには何一つその動きを見せぬ海。その海と身を共にしている者だけが、上げ潮が引き潮に移る瞬間を目にとらえることができるように、生の終る瞬間も、その生を共にする者だけが見るであろう。死に行く人自身が、正に死に行くことによって、自らの最後の生を、それを見守る人と共に生きたのであったから。

「喘ぎに喘ぎ続けて来た弟の表情が次第にゆるみ、そしてある瞬間に今までとは歴然と異なる、信じられぬほど穏やかな表情が弟の面を覆ったのだった。」

それは、この私までが思わず息つくほど、待ちこがれた果のようにや

く突然至った完璧な安息だった。」

その「穏やか」さは「今までとは歴然と異なるものでありながら、どんな精巧な医療映像機器にも映し出されることはないであろう。いや、そもそも「安息」を示す針をもった医療器など存在しないのだ。

「あ、これでよかったなあ」

声には出なかったが、私は弟に向って言っていた。私はふり返りうなづくと、医者はもう一度計器を覗いて確かめ、

「御臨終です」と告げた。」

息をつめて共に生き終った側の者に、その息をほっと吐いて、「あ、これでよかった」という他に何があるだろう。医者は、「もう一度計器を覗いて確かめ」、ただその死を追認する他に何をしよう。兄慎太郎氏は、この臨終の記を次の一節をもって結んでいる。

「私は、それまで閉じたまゝ、でいたベネシヤンのブラインドを引いて開けた。外には、病院に入る時よりもさらに明るく強い陽射しが照りつけ、やって来つつある季節を告げるように強い風が吹き、濡れた木々のたわわな緑が輝きながら大きく揺れていた。私は弟が夜ではなく、こんなに明るい陽差しの照りつける日中に、あの風に乗るためにその生から離れていったのがよく分かった。それをさらに明かすように、病院から出て仰いだ頭上には、時ならず大きく鮮やかな虹がかっていた。」

それは、照る太陽を後方にして仰がれるゲーテのあの《虹》が自らを証するために後に残映する七色であったに違いない。近代病院の小さな病室に閉じ籠められ近代医療機器に縛りつけられて、肉体の死と共に殆ど死に瀕していた霊が、今病室の遙か外へ、プネウマやスピリ

トウスという名の通り「風」に乗って生き返る。

マルテが「昔はそうでなかったように思う」と言った死とは、決して近代病院の中で近代医学によって判定されたりはしない、死に行く人自身の証しとしての死であった。いや、証しというならやはり、生きていた者が証される死というべきである。小林秀雄の言い草を借りれば、生きている間、人間になりつゝある動物であるところの人間が、今はつきりとした姿で人間となる死である。近代病院の中という仮死の状態から死に移るのではなく、その移点の判定こそ難しく、そんな迂路を経ずに、生きている者がはつきりと直ちに死ぬのである。だが、その「直下」とは？——マルテは続けて語っている。

「むかしは誰でも……人間はみな、死が自分の体のなかに宿っているのを知っていた。(ただ仄かに感じていただけであるにしても。)子供には小さな子供の死、大人には大きな大人の死。」しかし今日の私達は、平均寿命を数えながら、近代医学の教えるところに従順な生をしか生きておらず、つまり私達は、健康な時でも、目に見えぬ病室の中に閉ざされた健康をしか保っていないのである。そのように私達は、平均寿命に達するまでの《不死》を得ているが、そうして吾が命を担保に入れた《福祉社会》の中で、残された不死の期間に数えられながら(実は、数えながら、ではなく)生きているのである。つまり、生きながら死んでいるのである。「体の中に宿る死」を仄かにでも感じていれば、死につゝ、生きるところを。その《つゝ》こそ、生きる者が直ちに死ぬ、その直下を表す《つゝ》に他ならない。

西田も言っている。「普通には、唯だ生の否定として(死を考える、つまり)生から死を考えるが、……真の生命は、死を含むものでな

ければならない。」(括弧内・筆者)即ち、生が一つの肯定であるにしても、その肯定は、否定を内に含む肯定でなければならぬ。しかし内に含まれたる否定は、内に含まれたる故に、単なる無関心な否定にとどまることはできない。内に含まれたる死とは、一つ一つの生に固有なる、そして必ずや外なる死と現われる不治の死病である。一人一人だけのその死の歴史を表す病の名は、どんな広瀚な医学全書にも記載されえない。いや、一般に、病名は病人を詮らかにする以上に、むしろ匿すのではないか。

「病氣といふことも生命の中にあるのである。生きて居るものは、いつも病氣可能の状態にでなければならぬ。然らざれば、生きて居るものではない。……生物的生命といへども、既に然云ふことができる。」<sup>⑩</sup>と、西田は続けて語っている。いつも病氣可能の状態にあるその状態そのものは、目に見える病ではなく、謂わば病状なき病、しかもそれにおいて病氣の生ずるところの本源の病といふべきものである。その人々だけに固有なるこの本源の病を、精神病理学なら、その病理学としての挫折のなかで一瞬見ることがあろう。精神病の外部的症状が脳内部の生化学的異変の現われであろうとも、その異変自身がまた一つの外部的な現われにすぎないと知る時に。木村氏は述べている。「精神病の症状というものはそのまま、病氣の、外部への現われなのではなくて、患者の自己が不可視の病氣と対決している姿の表現だ」と。つまり、「症状とは、危機的な事態に対して患者が能動的に示す一つの応答にほかならない」と。<sup>⑪</sup>《死につゝ、生きる》がそのまゝ、生死の「危機的な事態」であれば、その危機に対してどう決せねばならないのか。再び生をもつてか、死をもつてではないのか。「能動的な」、しかし答えなき「応答」である。既に応答されている

のでなければ決してあらぬ答の。二十世紀前半のヨーロッパ哲学は、それを《実存》と称んだ。「不可視の病氣」といわれるものは、取り除かれるのではない。それは取り除きえない。それは、現代の研ぎ澄まされた医学の目もお届かぬ内部奥深い所にあるという意味で不可視なのではない。

どのように目にみえないのか。「真の生命は、死を含むもの」であるのならば、生の全体は生と死でできている、と言っても、それはほとんど同語反復でしかないであろう。しかしそのことを、一日の全体が昼と夜でできているようなものであると言えるであろうか。一日の生が、生の昼のほかに、死の、見えない夜をも抱えていること、それが、それぞれの生に固有なる目に見えない病であると言えるのだろうか。

私達は、秋になり日暮れが早く来るようになると、「もうすっかり日が短くなりました。」と言って挨拶を交すように、いや「日暮れ」という言葉自身が一日の終りを意味するように、日の出から日の入りまでをもって、つまり《日る》をもって、《日》と称んでいる。

それはしかし、かつての日時計時代の名残にすぎないであろう。かつて《日る》が即ち《日》であって、つまり夜が存在しなかったのは、夜がむしろ余りに漆黒の夜であったからに他ならない。仄かな灯りを暫くの間包みながらやがて包み籠んでしまう余りにも深い眠りの夜であったからである。それは決して逆説ではない。だから、逆に今日、夜が存在するのは、昼が限りなく延長され、夜が薄茶けてしまったからであると言っても、これまた逆説ではない。夜は、昼を継いで謂わば人工の灯で焼け焦げた臭いでのみ存在する。今日人間の所業に

よる《自然環境汚染・破壊》の問題が喧しく言われているが、夜という大きな《自然》をずっと前から汚し壊し続けていることに気付きもしていない目に、逆説とも映るにすぎない。

数学の群論は次のように教えている。

どのような要素  $a$  に対しても、 $a \cdot \varepsilon = a$  となるような特定の要素  $\varepsilon$  がただ一つ存在する。これを単位要素という。しかし単位要素の《存在》といっても、それは、要素  $a$  を、操作によって変化させることなく、謂わば自己同一性を保持せしめるところの操作そのものの、自同変換 (Self-transformation, Selbstabbildung) して《あらしめる》操作そのものである。従って単位要素  $\varepsilon$  はそれ自身として factor というよりも functor である。言うまでもなく、加法においては  $\varepsilon$  は 0 であり、乗法においては 1 である。

とするならば、夜なる単位要素  $\varepsilon$  を 0 とする方程式

日 + 夜 = 日

が成り立つのか。それは、《日》はそれ自身であると共に、否、それ自身で存在のために、0 なる、つまり存在せぬ《夜》を加え含めたものであるということ述べているのである。それが、一《日》の全体が、日と夜とでできていると言われることの意味でなければならぬ。それと同様に、生の全体が生と死とでできているとは、死なる単位要素  $\varepsilon$  を 0 とする方程式、

生 + 死 = 生

が成り立っているということである。あるいは乗法でいえば、それぞれ、

夜なる単位要素  $\varepsilon$  を 1 として、日  $\times$  夜 = 日であり、  
死なる単位要素  $\varepsilon$  を 1 として、生  $\times$  死 = 生である。



だが、0ではないその1は、どのように《存在<sup>あ</sup>》なのであろうか。  
《あらしめる》ところの《ある》とは？それは、『後半Ⅱ生』において論じられるであろう。

いづれにしても、以上のように、そして以上のようにしてのみ、誕生から命終るまでの一生は、日の入りから日の出までの一日に比せられる。そのような一日で、朝まだ八時の死であらうと、夕べの五時の死であらうと、夜の長さはいわず、日の長さにすら何らの変りもないのである。マルテは書いている。

「いとけない子供すら、ありあわせの『子供の死』を死んだのではなかった。心を必死に張りつめて、——既に成長した自分と、これから成長するはずであった自分を併せたような深遠な死をとげたのである。」

西田も、吾児幽子の五歳の死に書いている。

「今まで愛らしく話したり、歌つたり、遊んだりして居た者が、忽ち消えて壺中の白骨となると言ふのは、如何なる訳であらうか。若し人生はこれまでのものであるといふならば、人生ほどつまらぬものはない、此処には深き意味がなくてはならぬ。」<sup>(13)</sup>

しかし、いとけない子供が死ぬのでなくとも、私達は人の命を儚い命と称ぶ。それは夕べをすら知らぬ蜉蝣<sup>かげろう</sup>に似ているから、しばしば《かげろうの命》と言う。蜉蝣は英語で ephemera というが、これはギリシャ語のエペメロスの音訳で、エペメロスとは、一日（ヘメラ）の長さに亘る（エピ）という意味であり、やがて人の《一生》の別語ともなった。ギリシャの抒情詩人ピンダロスは詩っている。ヘルダーリンのドイツ語訳から重訳してみると——<sup>(14)</sup>

一日<sup>ひとひ</sup>だけに生れし ありて またなき 何者ぞ

人は ただ一場の影の夢

ピンダロスも、一日<sup>ひとひ</sup>だけの生を、それこそ陽炎のごとくに白昼の夢であると言っている。むしろ影の夢。つまり夜という影がみる影<sup>かげ</sup>ろう夢であると言っている。「ありて、またなき」て、一つの生の歴史は一つの死の歴史である。死につゝ、生きるところの。

しかし夢の光によって、その影そのものは正に影と消えるのか。そうとすれば、夢は、見られていることも知らぬ夢となる。日と夜をもつて日ではなく、日だけの日となる。生と死をもつて生ではなく、生だけの生となる。群論のいう自同変換のなく、生Ⅱ生の、生だけの生となる。

しかし日が日であるのが単に日Ⅱ日ならば、影ろわぬ日がいい。生が生であるのが単に生Ⅱ生ならば、老いと病いに影ろい移ろわぬ生がいい。見られていることも知らぬ夢の明るさそのものは、影ろいを拭いて、最高の《明晰判明》となるだろう。影ろいの去って夢も消え、しかしそのあとに再び夢が紡がれる。《明晰判明》に拠る最も《確実な》夢が。だが、確実なる夢とは、夢ではないであらう。こうして「人は」いない。しかし、これは、問題としては既に、ハイデガーが《存在<sup>あ</sup>の命運 Geschick des Seins》と称ぶところのものに属するだろう。<sup>(15)</sup>

——その《命運》において最初から、死を知らぬ中にいた近代医学は、ただその中を、つまり必然的に進歩するしかないその《医学の進歩》の道を歩んできたにすぎなかった。不病長寿こそが第一の人生の財宝としたデカルト哲学が描いた道を。そうしてそれは、生だけの生への最大の奉仕者となる。その奉仕は、生だけの生という狭い範囲

のなかで掂げられ測られる。生は生の中で数えられる。かく数えられ始めれば即ち、残り少ない生となる。そのような生に、死は、その僅かな残りもなくなつたということの他の何であろう。日だけの日の、それ自身明るい日のなか、分裂症患者が外とふれあわずにやがて枯死して行くように、今日の私達の生は、ほとんど立ち枯れていると言わねばならない。

—— 続く

(注)

(1) Die Aufzeichnungen des Malte Laurids Brigge (Sämtliche Werke Bd. VI, S. 709 ff.) がお唐木順三『詩と哲学の間』の第七論文・第二章を『この『マルテの手記』の冒頭を引用することから書き始めている。(全集第四卷三〇八頁以下参照) 本論文は、唐木順三の筆を真似ながらそこに助走を得て、十数行のちに謂わば離陸したいと思う。

(2) 岩波文庫版(落合太郎・訳) 七六頁

(3) 因みに、DNA・RNA分子模型の提示は、生命が生命活動という音楽であるとするれば、その総譜の読み方を見出したということである。五線紙の上にすべてが書かれている！それは、ピタゴラス派が和音の中に数的比例関係を見出した時以来の偉業であろう。しかし、たとえベートヴェンの一つの交響曲の全譜面を読み切ったとしても、実際に奏せられる楽音との間になおほとんど無限の径庭がある。それとも、そう言うのはロマンティズムの言にすぎないだろうか。

(4) Faust (Verlag C. H. Beck, S. 149)

(5) 『表現的自己の自己限定』(全集第六卷七二頁) なお抽象的ノエマ面といわれるのは、絶対無の自覚においては、表するノエシスと現するノエマは不離一如である故に、あえて分ければ抽象的ノエシス、ノエマとなるからである。そしてその「抽象的ノエマ面」そのものは、ただ「表現の野」であるといわねばならない。

(6) 『論理と生命』(第八卷二七八頁)

(7) 『自己・あいだ・分裂病』(『自己・あいだ・時間』一〇三頁)

(8) 『虹』(『わが人生の時の時』三〇九頁以下)

(9) 『論理と生命』(同卷二八一頁)

(10) 同箇所

(11) 『時間と自己』一八八頁

(12) しかし今道友信氏は、『自然哲学序説』の本論の最初の章を『夜』と題して、夜について深い思索をしている。

(13) 拙論『西田幾多郎、善の研究へ——付論・その二「ウィタ・モルタリス」で、この次女の死と父・幾多郎について論じられている。

(14) M. Heidegger: Hölderlins Hymne (Andenken) (Gesamtausgabe Bd. 52, S. 111) を参照。なお、ギリシャ語から直接の、井筒俊彦の訳は以下の通りである。

「一日の儚き生に生まれ来し人間はそも何者ぞ。

人間はただ一場の影の夢のみ」(『神秘哲学』第一部・一五二頁)

(15) M. Heidegger: Beiträge zur Philosophie (Bd. 65, S. 195—201) を参照。